



コートジボワールの復興に向け、現地の水産分野の専門家らと意見交換した井川さん（右から2人目）

海の資源を守り 人々の食を支えたい

開発途上国の農業や漁業の発展を後押しするJICA農村開発部。乱獲などで水産資源が減少している西アフリカで、持続的な漁業や流通の効率化などに取り組んでいるのが井川晴彦さんだ。

未来を語る アフリカの若者との出会い

昔から世界地図が好きで、時間があれば眺めていました。その中で特に気になっていたのが、中部アフリカのチャドです。学校で「ん」から始まる言葉はないと習っていたのに、この国の首都はンジャメナ。一体どんな国なんだろうと思っていました。社会人になり、夏休みを使ってエチオピアとチャドへ。しかしエチオピアでいきなり数人の若者に囲まれ、「お茶しよう」と。支払いを求められると覚悟したのですが、喫茶店に着くなり、彼らは「どうすれば日本のように発展できるか」と真剣に尋ねてきたのです。勝手な思い込みが崩され、衝撃を受けました。話せば話すほど彼らの情熱に心を打たれ、開発途上国の発展に貢献する仕事がしたいと思いました。

そこで、青年海外協力隊に参加し、派遣されたのは南米のチリ。特産品の海草がなかなか売れない漁村で、村人たちと対策を考えるのが仕事でした。まずは少し離れた町にある海草の加工工場を彼らと訪問し、どんな海草が求められているのかを調査。乾燥が不十分で石が混じっているなど、売れなかつた理由が村人たちは分かっていたようで、品質の改善に取り組み始めました。この経験を通して、国際協力にこれからも携わりたいとJICAに就職しました。

クーデターで 協力が中断

2008年にセネガル事務所に配属され、西アフリカ7カ国での水産分野の協力を担当することになりました。この地域の人々にとって、水産物は安価で貴重なタンパク源です。しかし、これまで必要以上に魚を捕り続けたため、近年は資源の減少が問題になっていました。

彼らの食を守るためにも、何とかしなければならぬ。そこで、漁に使う網の目を大きくすることで漁獲量を制限したり、流通の無駄をなくすために鮮度を保つ冷蔵庫を導入したりしました。

マリ中部を流れるニジール川のデルタ地帯の保全にも力を入れました。住民たちが魚を捕り過ぎたり、森林を伐採したりしたため、ここでも生活に必要な資源が急速に失われていたからです。

住民やマリ政府の職員、日本人専門家と対策を検討し、これから事業を本格化するという矢先、2012年3月に「マリでクーデター発生」の一報を受けました。情勢不安のため協力を中断せざるを得ず、国際協力の難しさを感じました。

貴重なタンパク源を守りたい

その後、農村開発部に異動になり、引き



JICA農村開発部
乾燥畑作地帯第二課

井川 晴彦
IGAWA Haruhiko

大学卒業後、商社に就職。退職後、青年海外協力隊、JICAエルサルバドル事務所のボランティア調整員を経て、2005年にJICAに就職。アジア第一部（当時）、セネガル事務所を経て、2013年2月から現職。



青年海外協力隊員として赴任したチリで、村人と漁に出る井川さん

続き西アフリカを担当しています。担当国の一つのコートジボワールは、2011年に内戦が終結し、今まさに復興の課程にあります。水産分野ではどんな協力がいいのか調査を行い、現地の専門家と協議した結果、南部を中心に養殖の復興を目指すことになりました。降水量が多く、内戦前から養殖に取り組んでいたこともあり、成果が出やすいと考えたのです。しかし、本当に復興が遅れているのは内戦の被害が特に大きかった中部や北部。いまだ貧しい生活を送る人たちに貴重なタンパク源を届けたいと、これらの地域でも養殖の整備ができないか検討しています。

途上国では、食料を輸入に依存している地域が多くあります。これからは自国の農業や漁業で生活を豊かにできるよう、日本の経験と強みを生かした協力を続けていきたいと思っています。